日本画

伊藤彫耳
（本名　伊藤　欣哉）

推薦理由

伊藤彫耳氏は，東洋の思想と仏教美術に造詣が深く，日本画の伝統の保存とその継承に対して，確固たる意志と情熱を持っている。多摩美術大学において，日本画を学び，小中学校や養護学校で教えながら院展に出品を続けた。日本の四季の豊かな自然や古典，歴史，人物等を取材し，長い年月をかけて研究し，時代を考証して描いてゆく制作態度は，堅実性と清潔感に溢れ，多くの日本画家の指標となっている。

【略歴】

昭和１３年６月７日　福岡県生まれ　８２歳

昭和３６年　多摩美術大学美術学部絵画科（日本画専攻）卒業

昭和３６年　東京都内区立中・小学校教諭（同 43 年まで）

昭和４１年　再興第 51 回院展初入選（「菩提寺」に対して）

昭和４３年　神奈川県藤沢市立白浜養護学校教諭（同 47 年まで）

昭和５５年　(財)日本美術院特待に推挙（同 58 年同人に推挙　※同 23 年公益財団法人へ移行）

平成　６年　(財)日本美術院評議員（同 23 年(3 月)まで，同 24 年(12 月)から現在まで）

令和　元年　南足柄の曹洞宗大雄山最乗寺に「道了尊首都圏御開帳の図」六曲一双屏風を納める

【賞歴】

昭和５２年　再興第 62 回院展奨励賞（「無畏」に対して）（後4回）

昭和５３年　第 33 回春の院展春季展賞（「大弁功徳天」に対して）（後 2 回）

昭和５４年　第 34 回春の院展奨励賞（「阿修羅王」に対して）（後 2 回）

昭和５７年　再興第 67 回院展日本美術院賞大観賞（「空点」に対して）（後 1 回）

平成　３年　再興第 76 回院展文部大臣賞（「産山・新牧（阿蘇外輪）」に対して）

平成　８年　再興第 81 回院展内閣総理大臣賞（「出会・二ヶ月」に対して）

日本画

村居正之（むらいまさゆき）

推薦理由

村居正之氏は，自らが作った絵の具を用いて，写実的でありながら心象風景としても表現された作品を制作している。原材料となる岩石の産地や粉砕後の粒の大小，加熱具合を研究するとともに，四半世紀もの間，ギリシャの世界遺産をモチーフとして追求，群青を主とした色の明暗・濃淡・色調の変化を模索し続け，独自の世界観を生み出すことに成功した。その一方で，長年にわたって後進の育成にも力を注（そそ）ぎ，現在も学生達（たち）に慕われる存在である。

【略歴】

昭和２２年４月２０日　京都府生まれ　７３歳

昭和４３年　青塔社入塾，池田遙邨に師事

平成　元年　岡山大学教育学部非常勤講師（同 13 年同大学院教育学研究科非常勤講師，同 17 年まで）

平成　６年　第 26 回日展審査員（後 4 回）

平成　７年　（社）日展会員（同 17 年評議員，同 26 年まで，令和元年理事，現在まで　※同 24 年公益社団法人へ移行）

平成１８年　大阪芸術大学美術学科客員教授（同 20 年教授，同 26 年学科長，現在まで）

【賞歴】

昭和５０年　第 7 回日展特選（「赤い陸橋（あかいりっきょう）」に対して）（後 1 回）

平成１１年　第 34 回日春展会員賞（「歴（れき）」に対して）

平成１３年　紺綬褒章（後 2 回）

平成３０年　改組新第 5 回日展文部科学大臣賞（「暮（く）れゆく時（とき）」に対して）

令和　２年　第 76 回恩賜賞・日本芸術院賞（「月照（げっしょう）」に対して）

彫塑

山田朝彦（やまだともひこ）

（撮影　丹保 太郎）

推薦理由

塑造は使用する材料の特質から，作者の存在の過程が否応（いやおう）なく強く表れるものである。山田氏の制作は，その学びの有様の特質から明らかにその作風を決定している。人体をベースにした表現を貫いていて，スマートな現代感覚に溢（あふ）れた美意識と，優れた形態観による美しさの追求は，現代具象彫刻の一つの典型を示している。大作から小品に至るまで細部に神経の行き届いた制作には今後の一層の充実と発展を期待させるものがある。

【略歴】

昭和１８年１０月１０日　旧朝鮮平安南道生まれ　７７歳
昭和４１年　明治大学商学部卒業
昭和４５年　太平洋美術研究所入所，彫刻を始める
昭和４７年　第 2 回日彫展初入選（「男（おとこ）」に対して）
昭和４９年　第 70 回太平洋展初入選，文部大臣奨励賞（「女（おんな）」に対して）
昭和４９年　第 6 回日展初入選（「男」に対して）
平成　６年　第 24 回日彫展審査員（後 5 回）
平成１０年　第 30 回日展審査員（後 5 回）
平成２４年　(公社) 日展評議員（同 26 年まで，同 28 年理事，現在まで）
平成２９年　第 82 回香川県美術展覧会審査員
平成３０年　(公社) 日本彫刻会理事・委員長（現在まで）

【賞歴】

昭和５８年　第 79 回太平洋展会員秀作賞（「裸婦（らふ）」に対して）（後 1 回）
昭和６０年　第 81 回太平洋展堀進二賞（「刻（こく）」に対して）
昭和６２年　第 19 回日展特選（「雄（ゆう）」に対して）（後 1 回）
平成　６年　第 90 回太平洋展安田火災美術財団奨励賞（「蒼（そう）」に対して）
平成１９年　ワコー文化賞
平成２１年　第 41 回日展日展会員賞（「悠悠（ゆうゆう）」に対して）
平成２４年　第 44 回日展文部科学大臣賞（「こもれび」に対して）
平成２８年　第 72 回日本芸術院賞（「朝（あさ）の響（ひび）き」に対して）

彫塑

吉野　毅（よしの　たけし）

推薦理由

　吉野毅氏は，具象彫刻一筋に創作活動を続けてきた。飛鳥，天平（てんぴょう）時代の仏像や，古代ギリシャ彫刻の造形を研究して，現代女性の伸びやかな姿を清新に表現した優れた彫刻作品を発表している。彫刻と空間の斬新な関係を創出する庭園モニュメントにも，優れた作品を残している。（公社）二科会，（一社）日本美術家連盟等の役員を兼務し，多くの社会活動に貢献している。

【略歴】

昭和１８年４月２３日　千葉県生まれ　７７歳
昭和４２年　東京藝術大学美術学部彫刻科卒業（同 44 年同大学院美術研究科彫刻専門課程塑像専攻修了）
昭和４３年　第 53 回二科展初入選・特選（「るい」に対して）
平成　６年　(財)鷹山宇一記念美術振興会理事（現在まで　※同 23 年公益財団法人へ移行）
平成　８年　(社)二科会評議員（同 18 年監事，同 20 年理事，同 24 年常務理事，現在まで　※同 24 年公益社団法人へ移行）
平成１３年　第 42 回青森県美術展覧会審査員
平成１６年　(社)日本美術家連盟委員（同 17 年まで，同 20 年から同 21 年まで，同 24 年監事，同 30 年理事，現在まで　※同 24 年一般社団法人へ移行）
平成１７年　多摩美術大学造形表現学部造形学科客員教授（同 28 年まで）
平成２６年　第 79 回香川県美術展覧会審査員
平成２９年　第 59 回秋田県美術展覧会審査員
令和　元年　第 73 回高知県美術展覧会審査員

【賞歴】

昭和４２年　安宅賞
昭和４２年　サロン・ド・プランタン賞（「るい」に対して）
昭和５７年　第 67 回二科展ローマ賞（「少女（しょうじょ）」に対して）
昭和６０年　第 70 回二科展会員努力賞（「わか女（おんな）」に対して）
平成１５年　第 88 回二科展文部科学大臣賞（「夏の終（おわ）り’03」に対して）
平成１５年　千葉県教育功労者表彰
平成２４年　第 68 回日本芸術院賞（「夏の終り’11」に対して）

書

髙　木　聖　雨
（本名　髙木　茂行）

推薦理由

髙木聖雨氏は，長年の深い思索とあくなき研究を重ね，古代文字による大字書作品を通じて，本物の書を模索している。また，すべての書法の体得を熱心に実践し，他の作家の追随を許さない独自の世界観を構築し，書の普及や活動の支援，日中交流やユネスコ等海外への発信，大学教授としての後進の指導とその活動は多岐にわたり，存在感は芸術の世界にとどまることはない。

【略歴】

昭和２４年９月８日　岡山県生まれ　７１歳
昭和４４年　青山杉雨に師事
昭和４８年　大東文化大学日本文学科卒業
昭和４９年　第6回日展初入選（「翼戴」に対して）
平成１３年　第33回日展審査員（後4回）
平成１５年　(財)全国書美術振興会理事（同28年理事長，現在まで　※同24年公益財団法人へ移行）
平成２１年　(社)全日本書道連盟理事（令和元年副理事長，現在まで　※同23年公益社団法人へ移行）
平成２３年　大東文化大学文学部書道学科教授（令和2年名誉教授）
平成２９年　読売書法会常任総務・執行役員副代表（同30年総務部長，同31年審査部長，現在まで）
平成３０年　(公社)日展理事（現在まで）

【賞歴】

平成　元年　第21回日展特選（「天馬」に対して）（後1回）
平成１８年　第38回日展日展会員賞（「協穆」に対して）
平成２７年　改組新第2回日展文部科学大臣賞（「駿歩」に対して）
平成２９年　山陽新聞賞文化功労
平成２９年　第73回恩賜賞・日本芸術院賞（「協戮」に対して）
平成２９年　大東文化学園栄誉章
平成２９年　岡山県文化特別顕彰

評論・翻訳

渡邊守章（わたなべ もりあき）

推薦理由

渡邊守章氏は，フランス文学，特に演劇を専攻し，多くの業績を達成してきた。フランス演劇の伝統と現代性とを結合し，その文学性・思想性の本質を解明する努力を重ねてきた姿勢は，先駆的かつ模範的なものとして広く評価されている。また，日本の能楽にも造詣が深く，能楽の演劇的な特質とフランス演劇との関連をめぐる独自の評論活動も注目される。

【略歴】

昭和８年３月２０日　東京都生まれ　８７歳

昭和３８年　東京大学大学院人文科学研究科仏語仏文学専門課程博士課程単位取得満期退学

昭和３９年　東京大学教養学部講師（同 41 年助教授，同 54 年教授，同 63 年総長補佐，平成元年まで，同 2 年同大学院総合文化研究科表象文化論専攻主任，同 5 年名誉教授）

昭和５２年　「ポール・クローデル　劇的想像力（げきてきそうぞうりょく）の世界（せかい）」により文学博士（東京大学）

平成　５年　放送大学教授（同 11 年副学長，同 16 年名誉教授）

平成１９年　京都造形芸術大学舞台芸術研究センター所長代理・教授（同 20 年所長・教授，同 26 年客員教授，同 29 年まで）

【賞歴】

平成１８年　第 43 回日本翻訳文化賞（ポール・クローデル著「繻子（しゅす）の靴（くつ）（翻訳）（上・下巻）」に対して）

平成１８年　第 60 回毎日出版文化賞文学・芸術部門（ポール・クローデル著「繻子の靴（翻訳）（上・下巻）」に対して）

平成１９年　第 58 回読売文学賞研究・翻訳賞（ロラン・バルト著「ラシーヌ論（ろん）（翻訳）」に対して）

平成３１年　フランス・レジオン・ドヌール勲章シュヴァリエ章

令和　元年　文化庁長官表彰

邦楽

豊　英　秋（ぶんの　ひで　あき）

推薦理由

豊英秋氏は，京都方楽家楽祖・豊原公連（とよはらのきみつら）から 38 代の名門に生まれ，宮内庁式部職として，歌謡・管絃（かんげん）・舞の各職域を修め抜群の評価を得て今日に至った。中でも笙（しょう）の演奏・右方舞の演技は格調高い気品に満ちたものとして，先師・識者の高い評価を受けており，重要皇室行事・国際交流等における活動は顕著である。氏は，同時に雅楽の古制を重視しながら常に芸術としての位置を意識し諸公演の企画監修に努めてきた。今日まで雅楽の継承発展に尽くした業績は極めて大である。

【略歴】

昭和１９年３月２７日　東京都生まれ　７６歳
昭和３１年　宮内庁式部職楽部予科生（同 34 年本科生）
昭和３１年　宮内庁晩餐会において童舞「胡蝶（こちょう）」の舞人で初舞台
昭和４０年　宮内庁式部職楽部楽師（平成 5 年楽長補，同 15 年楽長，同 19 年首席楽長，同 21 年楽部退官，技術指導員，同 25 年まで）
昭和４５年　国立劇場主催「蘇志摩利（そしまり）」復活公演に参加
昭和５２年　十二音会設立，委員長（現在まで）
昭和５４年　先進国首脳会議 宮中晩餐会において一人舞「還城楽（げんじょうらく）」を舞う
平成　元年　「大喪の礼」において「誄歌」の句頭を担う
平成　２年　「大嘗祭」「大饗」において国風歌舞の句頭を担う
平成　５年　皇太子殿下御成婚を祝い管絃曲「竹慶楽（ちくけいらく）」を作曲・初演
平成１８年　「退走禿（たいそうとく）」の舞を復元・公演（雅楽翠篁会）
平成２５年　神宮遷宮において久邇邦昭（元神社本庁統理）作曲「河水久澄（かすいきゅうちょう）」に作舞・奉奏
平成２７年　蕪嶋（かぶしま）神社より依頼「蕪嶋の舞」作曲・作舞
令和　元年　靖国神社より依頼「国護（くにもり）の舞」作曲・作舞

【賞歴】

平成２１年　第 65 回日本芸術院賞（「長年（ながねん）にわたる雅楽演奏家（ががくえんそうか）としての業績（ぎょうせき）」に対して）
平成２６年　瑞宝双光章

【参考資料】

(1) 概要

日本芸術院は，日本芸術院令第３条に基づき，芸術上の功績顕著な芸術家の中から補充すべき会員を毎年会員による選挙を行い決定しています。

日本芸術院は，その前身である帝国美術院が森鷗外を院長として大正８年に創設されて以来，現在まで約１００年の歴史を持ち，日本芸術院会員への選考は，美術，文芸，音楽，演劇，舞踊等の芸術各分野の芸術家から栄誉あることとして広く認識されています。

日本芸術院会員は，一般職の国家公務員（非常勤）で，年金額は２５０万円，任期は終身です。

(2) 選考方法

日本芸術院会員候補者の推薦は，毎年度，日本芸術院会員により行われ，全会員で組織する会員候補者選考委員会において選考します。その候補者について，各部において会員による投票を経て，総会の承認を得ることにより決定します。

(3) 選考経過

令和２年８月２１日から９月４日までの間，日本芸術院の会員に対し候補者の推薦を求めたところ，第一部（美術）９名，第二部（文芸）１０名，第三部（音楽・演劇・舞踊）３名，合計２２名の推薦がありました。

令和２年１０月１６日に開催した全会員で組織する会員候補者選考委員会において，１７名の被推薦者を会員候補者選考委員会が推薦する会員候補者としました。

当該候補者１７名について，令和２年１０月１６日から１０月２３日にかけて，各部において投票を行い，令和２年１０月２８日開催の部長会議において開票した結果，第一部５名，第二部１名，第三部１名が部会員の過半数票を得て会員候補者に内定しました。

内定者について，書面による会員総会の承認を経て，令和２年１１月１１日に会員候補者として決定しました。

(4) 上申

上記会員候補者７名について，　文部科学大臣に上申しました。

(5) 会員数（現員は令和２年１１月２６日現在）

日本芸術院会員（定員１２０名）は，第一部（美術：定員５６名）は現員４３名に５名加わり４８名，第二部（文芸：定員３７名）は現員２８名に１名加わり２９名，第三部（音楽・演劇・舞踊：定員２７名）は現員２４名に１名加わり２５名，合計で現員９５名に７名加わり１０２名となります。